

## 岳飛研究会について

## — 紀念岳飛誕辰888周年學術研討会に参加して —

友 永 植

## はじめに

現在中国に南宋の武將岳飛を研究対象にした岳飛研究会という学会がある。1985年に発足したもので、今日、中国岳飛研究のセンターの機能を果たしている。日本においても、その年次大会における優秀論文を掲載した『岳飛研究』や中国宋史研究会編の『宋史研究通訊』等を通じ、その活動を窺うことができる。私は昨年夏(1991年7月)杭州で開催された岳飛研究会の第3次年会に参加する機会を得た。<sup>(1)</sup> 今大会は、昨年が岳飛の生誕888周年に当たったことから、これを記念する學術研討会として挙行され、はじめて海外の研究者が参加した。以下、今大会における見聞をもとに、当研究会の概要や大会の様子などを些か紹介してみたい。

## 1 岳飛研究会の発足

岳飛研究会発足の経緯は『岳飛研究』第1集の前言に次の如く説明されている。すなわち「1984年冬、中国宋史研究会年会が杭州で開催された折、杭州大学宋史研究室と杭州岳飛墓廟文保所が共同で岳飛研究会の設立を發議し、参加した岳飛研究者の賛同と支持を得た。ここに於いて、全国の著名な学者を含む多くの人々が参加した岳飛研究会が杭州に於いて正式に成立した」と。この前言において興味深いのは、岳飛研究会の発足に杭州岳飛廟関係者が深く関わっていること

であるが、今回、大会に提出された浙江省文物局博物館処長陳文錦氏の論文「杭州岳廟文物保護工作的回顧和展望」を読み、その辺の事情がある程度納得できた。当論文は文革この方の杭州岳王廟の沿革と今後の展望を述べたものであり、「岳廟修復開放以後文物工作的簡要回顧」、「給岳廟の性質以科学的界定是好岳廟文物工作的關鍵」、「今後の發展和展望」の3章より成るが、研究会発足の経緯を窺わせる第1章を要約して紹介しよう。

(1) 杭州岳廟は南宋寧宗嘉定14年(1221年)の創建以来800年近い歴史をもつが、1966年に文革が始まると、「首当其衝、遭受了一场全面徹底の大破壊。所有文物幾乎蕩然無存、廟址也被改成了名為“取租院”的階級教育機關」といった状況に陥った。<sup>(3)</sup> しかし、文革が終焉し、1978年の十一月期三中全会以降、浙江省文物界が率先して岳廟の修復を提案し、文物部門が40万円を投資して、1979年に殿堂と陵園の全ての修復を完了した。次いで杭州岳飛墓廟文物保護管理所(文保所)が省文物局の認可を得て設置されると、岳廟の文物工作は正規の軌道に乗り、「變偶像崇拜的科學紀念」を總目標に掲げ、今日まで工作に取り組んできた。

(2) この間の文保所の活動は次の4点に集約される。すなわち①岳飛史迹の陳列、②文物收藏の充実化、③岳飛生誕紀念活動の復活、④岳飛研究会の会務の担当である。次にこれら活動の具体的な足跡を示すと、

① 文保所は1982年から陳列大綱の作成を始め、1984年に陳列作業を完成させ、10月1日に正式公開した。かくて岳飛史迹の陳列は様相を一新させ、総面積約400平方メートルの展示場に、関係する写真・資料・文物200余件が展示され、岳飛の一

生が十全かつ科学的に紹介されることになった。

- ② 1982年以降全国の書画界に働きかけ、作品の収集をはかった。その結果、今日文保所は沙孟海・岳石塵ほか国内外の著名な書家・画家の手跡を蔵するに至っているが、特筆に値することは、1989年にこの間散逸していた民国18年鑄造の青銅器7点を回収したことである。
- ③ 1988年の岳飛生誕885周年記念を皮切りに、旧暦2月15日の生誕記念活動を意識的に復活させている。この活動ははまだ廟内に限られた小規模なものではあるが、人々の脳裏にある岳飛の“神”としての心象を改変させ、人々の社会生活上に岳飛を意義づけさせる役割を果たすものである。
- ④ 1985年、杭州市文教工作の宣伝を主宰していた市委員会の関心のもとに、国内の著名な宋代史研究者・文物関係者及び関係各方面の人々による岳飛研究会が成立すると、文保所はその年間の会務を担当することになり（岳飛研究会の秘書処が文保所に置かれた）、学会の健全な運営を保証してきた。<sup>(5)</sup>

これによると、文革により徹底的な破壊を被った杭州岳飛廟が、文革終焉後の1978年以降、<sup>(6)</sup>浙江省文物界の後援のもとに、建造物の修復と岳飛崇拜の在り方の刷新を積極的に図ってきたこと、及びその中心が杭州岳飛墓廟文保所であり、特に1982年以降、陳列大綱の作成に象徴されるように、岳飛崇拜の“偶像崇拜”的在り方を改め、新たな社会的意義を岳飛に付与せしめることに重点を置いてきたことが了解されよう。思うに、1984年にその様な新基軸に基づいた岳飛資料が一般公開されたというから、同年における文保所の岳飛研究会設立の提案も、この一連の活動の延長線上で理解されるべきものであろう。今日、文保所は研究会の秘書処（事務局）を兼ねるとともに、大会に当たっては事務局としてその衝に当るなど、研究会の中軸として活動している。陳氏は文保所と岳飛研究会との関

わりを指摘した中で、「学会秘書長杭州大学副教授龔延明先生の支持下に、『岳飛詩歌選注』等の小型の宣伝資料を出版したが、これら資料は岳廟において岳飛と岳廟を紹介する文書資料を手に入れることができないという“文盲”現象を差し当たって改変してくれた」と述べている。文保所の立場からするならば、岳飛研究会はそのシンクタンク的存在であるともいえよう。

研究会の設立を提案したのは、文保所と杭州大学宋史研究室であったが、前者同様、後者も研究会の運営において重要な位置を占めており、それは発足当時の役員構成を見ても明らかである。すなわち役員としては、顧問鄭広銘北京大学歴史系教授、名誉会長楊招棟杭州市副書記、会長徐規杭州大学歴史系教授・宋史研究室主任、副会長陳文錦杭州市園文局副局長、副会長王曾瑜中国社会科学院歴史所研究員、理事兼秘書長龔延明杭州大学歴史系副教授、理事王春慶河南省湯陰県文保所所長兼湯陰岳飛記念館館長、理事王士倫浙江省考古研究所所長、理事顧文璧江蘇省無錫市文化局副局長、理事林正秋杭州師院政史系副教授・地方史研究室主任、副秘書長賈榮發杭州市園文局西区主任兼杭州岳飛墓廟文保所所長の諸氏が名を連ねており、杭州大学歴史系の徐規氏が会長を務め、龔延明氏が秘書長に任じている。なお、副秘書長には杭州岳飛墓廟文保所所長の賈榮發氏が任じているが、現在も三氏の研究会における役職に変化はない。

上述の文保所の活動に見る様に、浙江省文物界は岳飛に関して“神”的側面を廃棄し、それに代わる今日的意義を付与することに努めてきた如くであるが、かかる意向は岳飛研究会の主旨の中にも色濃く投影している。『岳飛研究』第1集の前言によると、研究会の主旨は「岳飛を研究し、岳飛を宣伝することで、岳飛研究活動の

深化と展開を組織・推進し、社会主義建設のための精神文化面での奉仕をなすこと」であるとし、その研究対象として、岳飛の生きた時代と社会環境、岳飛の平生の事迹・著作及びその思想と影響（特にその愛国思想が中国の伝統的な優秀なる文化と同一であるという点に意を注ぎ研究しなければならないとする）、岳飛の家族及び岳飛と関係がある同時代人などを挙げ、また大衆に宣伝了解させる事項として、岳飛が如何なる時代と条件の下に生まれ出た英雄か、後世の人が彼を崇敬する所以の行為と思想は結局如何なるものか、社会主義の“四つの現代化”を建設する上で、岳飛の精神遺産を継承・発揚することは如何なる意義をもつか、といった点を挙げている。客観的・総合的に岳飛を分析・研究し、現実社会の直面する課題との関わりにおいて、然るべき意義をこれに見い出そうという意図が察せられよう。

## 2 岳飛学術研討会

### 1 第1, 2回大会

岳飛研究会の年次大会である岳飛学術研討会は隔年に開催され、1986年12月に第1回大会が杭州で、1988年10月に第2回大会が岳飛の生誕地河南省湯陰県で開かれた。第1回大会の様子は詳しく知り得ないが、第2回大会については『岳飛研究』第2集が大会紀要を掲載しており、これによると、湯陰岳飛記念館が大会を主宰し、90余名の研究者が参加して、50篇近い論文が報告されたという。また、この大会で海峡兩岸岳飛学術研討会籌備小組が結成されたことが伝えられているが、第3回大会には台湾の研究者・関係者8名が参加した。

ところで、上記の紀要には触れられていないが、第2回大会中に岳飛の子孫よりなる岳飛後裔

聯誼会の設立が決定されたことは注目に値する。第3回大会に提出された岳力氏主編『岳飛家史考』所収の「訪岳飛後裔岳力先生」なる記事<sup>(9)</sup>は、発足の経緯を次の如く伝えている。

岳飛後裔聯誼会が益陽に成立したとのことで、我々は岳飛後裔聯誼会の発起人の一人、岳力氏を訪問した。

岳力氏は岳飛第32世の後裔に当たり、今年49歳、益陽市工商局に勤務している。(中略)88年10月、岳力氏は河南湯陰県に赴き岳飛研究会第2回学術研討会に参加した。会議期間中、彼は共に会議に参加していた岳飛第35代の孫の岳徳荘氏と提案し、岳飛研究会秘書長龔延明教授等の賛同を得て、岳飛後裔聯誼会を結成し、岳飛研究会の指導を受けることを決定した。

記事は更に聯誼会の主旨並びに結成時の参加者について次の如く述べている。

この会の主旨は、国内外の岳飛の後裔を連合し、岳飛を研究する上での様々な懇親活動を展開することである。岳力氏は次のような認識を持っている。すなわち、岳飛後裔聯誼会の会員は、民族の英雄岳飛の子孫として、祖先の“尽忠報告”の愛国精神と高風良節にして清廉勤政な民族の文化遺産を更に発揚して、岳飛思想を広く宣揚し、海峡兩岸の岳飛研究仕事を促進するために、然るべき貢献を果たさなければならない。岳力氏の紹介によると、最初に岳飛後裔聯誼会に参加した岳飛の後裔は、太原の岳徳荘、湯陰の岳朝綱・岳朝隆、杭州の岳邦軍・岳新華、黄石の岳鈞・岳武、黄梅の岳士傑・岳進、丹陽の岳逸民、洛陽の岳鴻昌、嘉興の岳石塵、益陽の岳力・岳寿康・岳勝葆・岳尚斌・岳軍輝等の18諸氏である。

岳力氏は先の編著の前言で、「岳飛公の直系の子孫として、我々は家譜の角度から、飛祖の世系と家史に関して必要な収集と整理を行い、広い読者と研究者に岳飛を研究する際の参考(資料)を提供し、国内外各地に散居する飛祖の後裔をして互いに消息を通じさせ、親睦を強化せしめる責任を感じる」と、子孫としての使命の所在を語っているが、それは今後岳飛後裔聯誼会の活動として具体化されて行くものと思われる。第3回大会に参加された岳力・岳徳荘両氏に

伺うと、現在岳飛の直系の子孫は中国に3万乃至4万人、台湾に約500人程いるとのことである。今回はじめて台湾から参加された岳偉勲氏の話では、台湾では岳飛の後裔が岳氏宗親会を結成し活動しているという。また、今大会に提出された台湾中国文化大学の程光裕氏の論文「台湾宜蘭武穆王廟一碧霞宮」によると、台湾には岳飛崇拜の拠点である宮廟が12座あって、中でも宜蘭の岳武穆王廟碧霞宮は廟としての結構が比較的備わっており、毎年、官民協力して岳飛の生誕記念祭を挙行し、また岳武穆聖母(岳飛の母姚太夫人)会を組織して、毎月研究会を開くといった活動を行っているという。今後、岳飛後裔聯誼会と岳飛宗親会は親睦・聯繫を深めてゆくものと考えられるが、このような岳飛後裔の宗族組織は、岳飛研究会のいま一つの核として、研究会活動を更に活性化させるものと期待される。

## 2 第3回大会



第3回大会開幕式(左から4人目が徐規会長)

第3回大会は1991年7月23日、杭州の杭州煤礦工人大厦で開幕された。当初の計画では、杭州における会期を消化した後、江南の岳飛戦跡を見学し、南京で閉幕式を行う予定であったが、7月に江南を見舞った水害の影響で移動できず、全日程を杭州で終えた。前述の如く、今大会は岳飛生誕888周年紀念學術研討会として挙行され、全国11省市の代表と台湾・日本の研究者、

併せて70余名が参加し、55篇の論文が寄せられ報告された。第2回大会が今大会に期した“海峡兩岸の研究者による岳飛學術研討会の開催”が実現したわけで、会長の徐規氏は開会挨拶の中でこのことを高く評価した。今回、台湾から参加されたのは、中国文化大学の宋晞教授、国立台湾大学の王徳毅教授、国立成功大学の金中樞教授、国立工業技術学院の趙振績教授、中興大学の王明蓀教授、岳氏宗親会の岳偉勲総幹事、高雄工專の宋丘龍副教授、華僑中学の蔡世明教諭の諸氏である。宋晞・王徳毅両氏はじめ台湾の宋史座談会の中心メンバーが参加されたことを考えると、今大会の意義が自ずから推られる。日本から参加したのは私一人であったが、広島大学の寺地遵氏が論文を提出されていた。<sup>(1)</sup>

今回、大会へ強く私を誘ったの、岳飛の後裔に会えるかも知れないという期待であった。幸いに大会には5名の岳飛の後裔が参加されており、親しく話をする事ができた。参加されたのは、太原の35世の孫岳徳莊、益陽の32世の孫岳力、台北の27世の孫岳煒勳、常徳の32世の孫岳錫厚、邵陽の26世の孫岳米郷の諸氏である。また、岳飛の刎頸の友であった貢祖文の後裔貢吉康氏も参加し、貢氏を含めた6氏は会期中に座談会を開き、『岳飛宗譜』等の資料の収集・整理と『岳飛家史考』続編の編纂作業について意見交換をした如くである。今回提出された岳力氏主編『岳飛家史考』は、氏の独自の調査によって得られた岳飛関係の資料や岳飛後裔の消息を編集した労作で、続編が大変期待される。

大会は、1日目(23日)開幕式と大会論文の報告(14篇)、2日目(24日)分組討論会、3日目(25日)分組座談会、4日目(26日)閉幕式という日程で行われた。開幕式は賈栄発副秘書長が司会を勤め、徐規会長、浙江省・杭州市政府関係者、宋晞教授等が相次いで大会挨拶を行った。大会論文は、



岳飛の後裔諸氏（右から2人目が岳焯勳氏，3人目が岳徳荘氏，5人目が岳力氏）

岳飛研究会理事の朱瑞熙上海師範大学教授と副会長の顧文璧江蘇無錫市文化局副局長の司会によって、14篇が報告された。2日目の討論会は3分組に分かれて行われ、私の加わった二分組には徐規・王徳毅・朱瑞熙・龔延明・兪兆鵬氏ほか18名が参加し、王徳毅・朱瑞熙氏の司会で、7篇の論文が報告された。3日目の座談会は各分組で行われ、二分組は朱瑞熙氏が座長を勤め、岳飛墓廟の今後、前回の優秀論文の選出、次回大会の開催地などについて意見交換がなされた。



二分組討論会（奥の列右から王徳毅氏，朱瑞熙氏，前列右から3人目が龔延明氏）

上述の如く、研究会の主旨のひとつが岳飛とその時代を総合的に分析・研究するというものであることから、今大会に提出・報告された論文は分野・テーマともに多様であった。55篇の論文は、分野に関していえば、やはり政治制度

に関するものが多く、政治史乃至政治思想史に関するものが24篇、制度史に関するものが4篇、人物史といえるものが11篇、文物資料に関するものが9篇、その他研究動向・地域史・文学・教育等に関するものが7篇で、テーマに関していえば、岳飛個人を対象としたものが19篇、岳飛と他の人物を取り扱ったものが10篇、高宗趙構個人に関するものが3篇、秦檜個人に関するものが2篇、その他宗澤等個人を扱ったものが3篇、この他に宋代の官制・岳飛関係の地域と文物・宋朝の外交・紹興和議等各種テーマのものが18篇といった内訳であった。徐規会長は大会挨拶の中で「岳飛と彼の生きた時代環境の連関に注目して研究を進めること、並びに岳飛の精神と中国の優秀な伝統文化との関係を重視し、岳飛の家譜の整理と岳飛後裔の分布の研究を重視することが始められた。これは新しい成果であり、我々はこの貴重な文化資源を継続的に開発するとともに、更に進めて岳飛の愛国精神をして兩岸同胞と国内外の炎黄の子孫の紐帯と橋梁の役割を果たさせる責任がある」と述べ、今回寄せられた論文を総括した。

大会は7月26日、4日間の会期を消化し、次回大会を1993年秋に南京で開催することを大会秘書処が宣言して、全日程を終了した。<sup>(12)</sup>

## おわりに

岳力氏の『岳飛家史考』に掲載されている「岳飛研究会岳飛後裔聯誼会通訊録」によると108名の会員が登録されており、その住地は東北・西部の一部を除くほぼ全土及び台湾・カナダに亘っている。岳力氏によると、近年来、各地で盛んに岳氏宗譜が作成されており、また各地の岳氏の村民から岳飛の後裔を自称する手紙が送られて来るそうである。真に岳飛の後裔か否かは、

家譜の内容を検討し決定するとのことであるが、“英雄の後裔”にとって、そのことを公に誇ることのできる世の中が、漸く訪れたようである。

最後に、大会への参加をお取りなしていただ

いた上海師範大学朱瑞熙教授、大会期間中ご高配を賜った徐規会長・龔延明書記長、及び懇切に岳飛の後裔の消息についてご説明下さった岳徳荘氏ほか後裔の方々に、この紙面を借り厚く感謝申し上げたい。

[註]

- (1) 私は1991年中国に遊学したが、その折ご指導を賜った上海師範大学の朱瑞熙教授（同大学前古籍整理研究所所長・岳飛研究会理事）のお取りなしをいただき、今回参加する機会を得た。
- (2) 後述の岳力氏編『岳飛家史考』及び湯陰岳飛記念館の王春慶・陶濤氏が今大会に提出した論文「湯陰岳飛的地位和作用浅議」によると、杭州岳王廟の地は、1163年に岳飛の冤罪が雪がれた後、遺体が改葬された場所で、1121年に岳飛の功徳を顕彰するため褒忠衍福禪寺

が造営されたという。その後、岳飛の墓所ということで、生誕地湯陰の湯陰岳飛記念館とともに、岳飛祭祀の二大中心地として文革までは人々に親しまれてきた如くである。

岳飛を祀る廟は華中を中心に各地に存在する。『岳飛家史考』はその様な諸廟を列挙し、その沿革を記しているの、これを整理し一覧表にすると以下の如くである。

表1 各地の岳王廟

祠 廟	所在地	始建年代	西暦	岳飛との関係	発願者
宜興岳飛生祠	江蘇省宜興	南宋・建炎4	1130	岳飛抗金	宜興人民
靖江岳飛生祠	江蘇省靖江	建炎4	1130	岳飛抗金	靖江人民
岳陽武穆祠	湖南省岳陽	紹興31	1161	岳飛駐軍	岳州人民
鄂州岳王廟	湖北省武昌	乾道6	1170	岳飛駐軍	鄂州人民（雪冤後）
九江岳忠武王祠	江西省九江	乾道6	1170	岳飛の旧宅	
杭州岳王廟	浙江省杭州	嘉定14	1221	岳飛墓所	杭州府同知馬偉奏請
湯陰程崗村岳飛廟	河南省湯陰	明・洪武9	1376	岳飛の故宅	明の太祖
湯陰岳飛記念館	河南省湯陰	景泰1	1450	岳飛生誕地	翰林侍講徐呈（欽差巡視）・郷紳
丹陽岳廟	江蘇省丹陽	景泰2	1451	岳珂の任地	丹陽人民
朱仙鎮岳飛廟	河南省開封	成化16	1480	岳飛駐軍	河南左布政使吳節・知府張岫
泰州岳飛廟	江蘇省泰州	万曆10	1528	岳飛抗金	泰州人民
麒麟村岳武穆廟	河南省内黄	明代	?	岳飛成長（伝）	
嘉興岳忠武王祠	浙江省嘉興	明代	?	岳飛旧住	岳飛18世の子孫
益陽松樹橋「岳飛廟」	湖南省益陽	清・乾隆26	1761	岳雲遷居	岳雲の子孫
杭州衆安橋岳飛忠精廟	浙江省杭州	道光13	1883	岳飛の埋葬地	名士
台湾宜藍岳武穆王廟	台湾宜藍	光緒25	1899		進士楊士芳

王・陶氏論文は、岳飛が民族英雄であることから、中国が民族的・国家的危機に晒されると、岳飛祭祀のポルティジが高まることを指摘しているが、この表からもその様な傾向が窺われ、“北虜”の侵攻に悩まされた明代後半に岳飛廟の建設が相次いでいることが分かる。王・陶氏によれば、1450年の湯陰の岳飛廟建設は、1449年の“土木の変”が直接的原因であるという。すなわち、両氏は『湯陰精忠廟志』（明・張応登等輯、10巻）

巻1を根拠に、ほぼ次の如く論じている。「土木の変」直後、景泰元年（1450）に即位した代宗は、オイラートの侵入に備えて、各地の戦略要地に十数人の高官を派遣し、全国人民を対異民族闘争に立ち上がらせるための組織作りを進行させた。彰徳府に派遣された翰林侍講徐呈は、府下の湯陰県に赴き、耆老からこの地が岳飛の生地であり、岳飛の祖先の墓が現存することを聞き、郷紳をして岳祖墓の祭祀と修築を行わせた。翌

2年(1451)、徐呈は湯陰県に岳飛廟を建造することを奏請し、許された。その年11月に岳廟は完成し、代宗は“靖忠之廟”の榜を賜り、春秋の祭祀を有司に義務づけた」と。なお、南宋より現代に至る中国人の岳飛観の変遷については、寺地遵氏が「岳飛の死」(平凡社『月

刊百科』第239号、1982)の中で言及されている。

参考までに、岳力氏の編著と王・陶氏の論文から、杭州岳王廟と湯陰岳飛記念館(岳廟)の沿革を整理し、表示しておこう。

表2 《杭州岳王廟》と《湯陰岳飛記念館》の沿革

時代	西暦	《杭州岳王廟》沿革	《湯陰岳飛記念館》沿革
南宋・隆興1	1163	雪冤後、孝宗、遺体を栖霞嶺下に改葬。	
嘉定14	1221	褒忠衍福禪寺を建立、岳飛の功德を顕彰。	
元	13C~14C	廃棄。	
明・洪武4	1371	復興。	
宣徳	15C	火災により損壊。浙江右布政使黄敷仲、重修。	
景泰1	1450		翰林院侍講徐呈、岳飛廟建造を奏請、造営。
景泰2	1451		代宗、礼部大傅兼尚書を派遣、岳廟を祭る。
天順1	1457	杭州府同知馬偉、岳飛廟建設を奏請。	
天順3	1459	馬偉、褒忠衍福禪寺を岳王廟に改建。	
弘治9	1496		巡按御史長洲陸公、知県等に命じ、廟を拡充。
弘治14	1501		廟を拡充・修理。
弘治	15C	兵火に焼かれた後、太監麦秀、再建。	
正徳8	1513	都指揮李隆用、秦松・王氏等の跪像を鑄造。	
嘉靖37	1558	総督御使胡宗憲、廟を修復し、跪造を重鑄。	
万曆14	1580		修復。
天啓2	1622		修復。
万曆22	1594	按察使范、跪像を重鑄。	
清・順治8	1651	巡撫都御使范承謨、重修。	
康熙21	1682	兩淮轉運使羅文瑜、重修。	
康熙31	1692	知府李鐸、重修。	
康熙54	1715	総督范時崇、重修。	
雍正9	1731	総督李衛、重修。	修復。
乾隆2	1737		修復。
道光5	1825		修復。
民国7	1918	大重修。	
中華人民共和国	1952		毛沢東、湯陰を訪れ、岳廟保護を指示。
	1958		岳飛記念館建設。
	1959		胡耀邦、業務を視察、岳廟を参観。
	1961	総理周恩来、全国重点文物保護單位に認定。	
	1963		岳廟、河南省重点文物保護單位に認定。
	1966	文革開始、岳墓破壊、岳廟損壊。	文革開始、記念館・岳廟ともに破壊。
	1978		復興・再建。
	1979	浙江省人民政府、岳廟を重修、岳墓を再建。	
	1981		一般公開。
	1988		記念館にて第2回岳飛研究会を開催。

- (3) 取租院とは、解放前に地主階級が租の取り立てを行なった建物であり、解放後、地主階級の人民に対する搾取の象徴と見なされた。四川美術学院の教師と学生は、四川省大邑県の地主劉文採がその取租院において農民を搾取虐待した様を塑像にあらわし、この作品に取租院という題名をつけ発表し、話題を呼んだ。
- (4) 杭州岳飛墓廟文物保護所の組織上の位置づけは、関係者に直接確認したわけではないが、第1回大会における岳飛研究会副秘書長賈榮發氏の肩書が「杭州市園文局西区主任兼杭州岳飛墓廟文保所所長」であることからして、杭州市園文局所轄の組織と推測される。
- (5) 『岳飛研究』第1集所収「岳飛研究会組織機構名単」の末尾に「岳飛研究会秘書處、設在杭州岳飛墓廟文保所、聯系人：賈榮發」とある。
- (6) 周知の如く、1976年に毛沢東が死去、「四人組」が逮捕されて文革が終焉し、1977年には党副主席として鄧小平が復権した。そして翌1978年、中国共産党第11期

中央委員会第3回総会（三中全會）が開催され、革命路線から現代化路線への転換がはかられた。

- (7) この前年1981年開かれた中国共産党第11期中央委員会第6回総会（六中全會）において、所謂“歴史決議”が採択され、文革の否定、それを発動した毛沢東の理論と指導における誤りが指摘されたことは周知の如くである。岳飛の再評価も、これを機に急テンポで進められたものと考えられる。
- (8) 『岳飛研究』第1集所収「岳飛研究会組織機構名単」
- (9) 当記事は、1989年1月15日付『信息広告報』に掲載されたものを、岳力氏が編著に採録したものである。
- (10) 実際、岳力氏は編著の中で湯陰・杭州・宣興・黄梅・丹陽・南昌・益陽・太原・洛陽・台北・カナダ等30ヶ所の後裔の消息を採録している。
- (11) 寺地遵氏「岳飛、秦檜在宋代政治上的地位探論」
- (12) 今大会については、現地の「杭州日報」と『浙江日報』が、7月24日の紙面で下の如く報道した。

本報訊

(記者姜青青)  
昨天，来自全国十多个省市包括台湾的专家学者

# 岳飛研究有新突破

## 第三屆岳飛研究会年会在杭開幕

80多人聚首杭城，参加纪念岳飛诞辰888周年学术研讨会暨岳飛研究会第三屆年會。

记者从大会提供的近60篇学术论文来看，本届年會参加人数之众、论文之多，都是前两屆年會所不及的，特别可喜的是岳飛研究有了新的突破，主要表现在：

岳飛研究圈更为扩大。参加本次研讨会的除了一批学术界名宿之外，还有很多是二三十岁的青年人，他们向大会提交了颇有见地的一批学术论文。台湾有数位宋史专家、教授赶来与会，这是台湾学者首次来大陆参加岳飛研究会。日本广岛大学教授寺地遵也为本次大会寄来了论文。

岳飛研究的内容也更为丰富。除了对岳飛生平及其业绩评价的论文外，更多的是以新的角度出发撰就的论文，有联系岳飛同时代人进行讨论，有通过岳飛史迹研究其所处时代政治、军事、经济和文化的，有研究岳飛精神与传统文化关系，还有从心理学角度出发研究岳飛性格、心态及其悲剧的，涉及范围十分广泛，这也是前所未有的。

此外还有一个新的迹象表明，岳飛家譜已开始引起学术界

的重视，论文中就有从岳飛家譜谈南宋移民活动这样的新选题。而长达14万字的

《岳飛家史考》，更是这一方面的力作。

岳飛研究会会长、杭大历史系教授徐规说：在岳飛研究方法上，过去孤立地就岳飛事迹来研究岳飛的较多，而这屆年會，开始注意把岳飛与其所处的时代环境联系起来进行研究，这是一个新的突破，这预示着岳飛研究正向更高的水平迈进。

省委宣传部长孙家贤、市委宣传部长史济恒等参加了昨天的开幕式。

(浙江日報より)

### 纪念岳飛诞辰888周年学术研讨会在杭举行

本報訊 纪念岳飛诞辰888周年学术研讨会暨岳飛研究会第三屆年會，昨天在杭州開幕。

来自全国各地的70余位宋史专家、台湾学者和日本朋友汇聚岳飛当年遇难之地，交流岳飛研究的新成果，以寄托对这位民族英雄的追求与敬意。

岳飛研究会会长徐规教授致开幕词。

参加这次学术研讨会的55篇论文，研究课题广泛，其中有大陆学者的《从岳飛及其部将的仕历看南宋前期武官的升迁资序》、台湾学者的《宋高宗和岳飛》、日本学者的《岳飛、秦檜在宋代政治上的地位探论》等。(本報記者 高燕)

省委常委、宣传部长孙家贤到会讲了话。岳

(杭州日報より)